

ウトロに生きる ウトロで出会う



京都府宇治市伊勢田町ウトロ51番地。ここは、第二次世界大戦時に、京都飛行場建設のために集められた朝鮮人労働者たちの飯場跡に形成された集落です。戦後、様々な事情により朝鮮半島に帰ることのできなかった人々が暮らすこの地区は生活インフラ整備からも取り残され、社会の無理解と偏見、差別に苦しめられました。今回、今年4月に開館したウトロ平和祈念館の田川明子館長にお話を伺いました。

（インタビュアー：藪本 雅子（やぶもと まさこ）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者を経て現在フリーで活動）

藪本 私は京都の生まれですが、実はウトロのことをよく知りませんでした。ウトロの歴史を教えてくださいいただけますか。

田川 1943（昭和18）年、京都飛行場建設が計画され、安く強靱な労働力として朝鮮人が集められました。当時は1,300人ぐらいいました。ぼろ家ですけれど、飯場に家族そろって住める。配給も若干ですが、割り増しだったとウトロのおばあさんが証言しています。それで、国策の事業だから、他に徴用されていく心配がない。当時の貧しかった朝鮮人には労働は過酷であっても魅力的だったんです。

藪本 強制連行で連れてこられた人たち、というニュアンスではないのですか。

田川 そこは、本当にもめるところで、私たちも徹底的に調べました。強制連行と言える人は一人、福岡の炭鉱から逃れてきた人だけです。未払い賃金もあります。しかし、1945（昭和20）年8月15日の終戦を境にそれがなくなるわけです。いつの間にか「ああせい、こうせい」と自分たちに言っていた日本人が消えたと彼女たちは表現するんですよ。一瞬の開放感があったと思いますよ。でも、実質的に捨て置かれたわけで、そこからが困難の始まりでした。当

田川 明子 さん

30年以上にわたり、本業の傍ら「ウトロを守る会」において日韓の市民団体と連携し、ウトロ地区のまちづくり、在日コリアン住民の支援活動に尽力。2022（令和4）年4月30日、ウトロ平和祈念館の開館と同時に、初代館長に就任した。

時、日本の政策としては朝鮮半島へ帰す方針でした。だけど持ち出せるお金には制限があり、家族の中に病人や妊婦がいる等、様々な事情で帰れない人もいた。国を離れて、時間が経ち、さらに朝鮮戦争*1も始まって、ますます帰る当てがなくなりました。敗戦により日本も貧しかったのですが、朝鮮人は職業や生活のあらゆる局面で差別を受けました。ウトロ地区は劣悪な生活環境でしたが、それでも、同胞たちが助け合いながら生活できる場でしたので、他の地域にいた朝鮮人も空き家をもらい受けたりして流入してきました。

藪本 ウトロの人たちは、どういう暮らしをしていたんでしょう。

田川 生きて家族を養うために何でもしました。中には土木事業で成功した人もいます。京友禅の工場もあって、手に職をつける人もいました。ただ、就職差別は大変に厳しいものがあって、若い人たちは将来に希望が持てなかったと思います。親は学校に行けなかったもので、読み書きができません。その屈辱を知っているから、子どもには一生懸命勉強させるんですよ。だから、次の世代で、大学に行った人は大勢いますよ。弁護士になった人もいます。

藪本 学校の入学式の写真から、並々ならぬ親の気持ち伝わって

きますね。

田川 そう。親は、一生懸命プリーツスカートにアイロンをかけたのです。アイロンといっても、電気ではなく炭をボロッと入れるようなもの。「田川さん、この線が真っすぐやろう」と自慢するんですよ。「そんなときのお母ちゃん、の気持ちを分かって」と言われるとね、私もグツときてしまうのです。親が、なぜそんなに一生懸命になるかということも、子どもは分かっている。だから、頑張り屋さんが多いですよ。

●ウトロ、水道ないねん

藪本 田川さんがウトロと関わるきっかけは何でしょう。

田川 1985（昭和60）年頃、在日外国人の指紋押捺拒否運動が始まりました。私はそれまで何も知らなかったことに驚愕して、応援していたのです。その時、私と同じ年の女性に出会いました。その人が「私、ウトロの生まれやねん」と言うのです。私はウトロが何のことか分からなかった。続いて「ウトロ、水道ないねん」と言われました。この時代に水道がないなんて信じられないことです。それで、ウトロへ行って、現実を見て、衝撃でした。京都駅から30分もかからない近鉄沿線ですよ。そこにバラックのような家が、ひ

しめいていました。大げさではなく、水道がないのは命に関わることです。ウトロの人も宇治市民じゃないのかと、すぐに「水道敷設を求める会」をつくりました。

藪本 すごい行動力ですね。

田川 だって、ひどいじゃない。例えば、電車に乗っていて、隣の人が具合悪そうにしていたら「どうしました」と声を掛けますよね。それが、ウトロだったんです。そして、聞けば聞くほどとんでもないことになっている。水道はない、下水道もない。大雨が降るとウトロを流れる小さい川が氾濫して、すぐに床上浸水ですよ。さらに、いつの間にか土地が民間の会社で転売されて、地上げで追い出されそうになるという、次から次と考えられない難問が降ってくるわけですよ。いったん「どうしました」と声をかけた以上は、ギブアップはないなと思いました。

藪本 土地の所有者が起こした裁判で、2000（平成12）年に裁判所から退去命令が出たときは、大変だったでしょう。

田川 所有権争いで勝てるはずはないと、私たちは思っていました。だけど、ウトロのおばちゃんたちは、「昨日まで住めてたんや。何で、明日はあかんねん」と、ここで生き抜いてきたから言える根拠のない確信を堂々と言える。土

* 1) 1950（昭和25）年6月25日～1953（昭和28）年7月27日。南北に分断された朝鮮半島における戦争。

地といえ、投機の対象でしょうけれども、ここで生きていくしかない人にとって、必要不可欠なものですよね。おばちゃんは「地上げって、これで2回目やねん」と言うのね。「植民地支配された時な、むしろ、国ごと地上げされたん。それで、今度で2回目や。人付き、家付きで地上げされるの、慣れたもんやで」と。そのユーモアというか、たくましさというか。京都地裁で、完璧な負けの判決を受けたときに、法廷の前で待ち受けているマスコミに対して「人間が先か、法律が先か、どっちやねん、この社会は」と、こう言ったんですよ。すごいでしょう。物事の本質を突いたことを言うんですよ。

藪本 カッコイイ言葉ですね。

田川 所有権争いで勝てなくても、人権で闘うことに気付かされました。ウトロの人たちの人権を守るには住まいを守らないといけない。この主張を支えてくれるのは国際人権規約²だと思い、ジュネーブ（スイス）の国連欧州本部に行ってプレゼンしました。そうしたら、国連人権委員会（現：人権理事会）の特別報告者ドウドウ・デイエンスさんが日本に視察に来てくれたのです。ウトロのおばちゃんたちはフランス語しか分からない人に、関西弁で一生懸命もてなし

たの。セネガル人だからきつと辛いの好きやとキムチを用意してね。それで、デイエンスさんは「近代的な日本でこのような状況を見てショックだ。貧困など厳しさの一方、住民の尊厳や連帯感を感じた」とレポートを出してくれた。日本の政府も読んでると思う。でも、日本政府はウトロの土地を買い上げませんでした。同和対策では、国の補助金の下、自治体がい上げるという方法でやってきたのですけれど。それで、韓国政府が同胞の窮状をなんとかしたいと、30億ウォン、日本円で3億6千万円の支援を国会で決めたんですよ。さらに、韓国の市民団体が6千万円も集めてくれました。それで土地が買えたんです。ウトロの土地の3分の1程ですが、ともかく不法占拠状態を早く解消して、ウトロの人たちを一人もホームレスにさせないという思いでやってきました。今、その土地に、市営住宅が建ち、引っ越しが始まっています。

藪本 難問に対して一緒に闘ってきたんですね。

田川 そう。一番はつきりしているのは、私はあした、追い出されるところにはいない人間。この人たちは、あした、あるいは、あさって、追い出されるところにいる人間。この違いを知ってしまった人間が、「いち抜けた」はできない。

「一銭の得にもならんのに、何でそんな一生懸命になれん」と聞かれて冗談で返すのですが、「ウトロ丸に飛び乗ってしもたんやもん。気が付いたら、この船、思いのほか、ぼろ船やった。底に穴は開いているわ、舵はないわでびっくりした。いずれにしろ、どこかの岸に着けないとあかんやん」と言って、あははと笑っています。

●ヘイトクライム事件

藪本 一部ネットでは、不法占拠だとデマが流れ、それを信じた人が放火するというヘイトクライム事件³が起きました。この人たちが、どんなに傷付いたことでしょう。

田川 はい。若い人は、自分の体が焼かれたみたいな気がしたと言っていました。でもね、おばちゃんたちは言っていました。「まだ22歳で、人生、棒に振るようなあほなことして。（ウトロに）聞きに来たらよかったんや。教えてあげるがな」と。それで、そこに「腹減ってたなら、食べさせてあげるがな」という、いつもの文句が付くんです。多分、朝鮮民族の人たちの、麗しい風習だと思うんですが、外から来た客をおなかつかした状態で帰さないのです。だから、「ごはん、済んだか」というのがあいさつですよ。

* 2) 「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」（社会権規約／A規約）及び「市民的及び政治的権利に関する国際規約」（自由権規約／B規約）。この二つの国際人権規約は、最も基本的かつ包括的な条約として人権保障のための国際的基準となっている。

※参考：外務省「国際人権規約」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kiyaku/index.html>

藪本 温かい人たちですね。館長は、放火をどのように思われましたか。

田川 憤りというより、情けなかったですね。今、私は自分の活動の中で、若い人に伝えることの大切さを実践しているつもりでいたけれど届いていない人がいっぱいいると思いました。それで、一番ショックだったのは、ウトロに住んでいる子ではなくても、在日の子がこのことをどう思うか。大人は差別を散々体験しているし、自分をなんとか慰める方法も、いろいろな思考も持っている。でも、子どもは、自分がいたらいけない存在なのかと思ってしまうのか。つらすぎませんか。だから、罪深いと思った。彼（犯人）はネットの世界だけでいろんな事象に出会っているんでしょうね。私たちがこの館を造るに当たって、コンセプトを「ウトロに生きる ウトロで出会う」というのにしたんです。まさに、ウトロで出会ってほしいかった。あんな出会い方ではなくて、自分が体験していないことを、くぐり抜けてきている人たちばかりなんです。私はその人たちの話を聞いてきて、自分の人生がすごく豊かになったのですから。

●在日問題ではない

藪本 平和祈念館からどんなメ

ッセージを発信したいですか。

田川 ウトロは、戦争で生まれたまちです。だからこそ平和を祈りたい。今、世界では理解しがたいことが起こっているけれども、平和だから人が集えるのですよね。ウトロには、北も南もない。在日も日本人も、社会的な地位の差もない。みんな横一線。ウトロを守りたいという気持ちだけで集まってきました。卒業しても、来てくれる。この祈念館を設計してくれたのもここに来ていた元学生。「まけてや」と言ったら「覚悟の上です」とか言いながら。

藪本 展示内容や表現は、苦勞なさったのではないですか。

田川 それはもう、バックグラウンドの違う人間が集まっていますから。ここで一番大事なことは何か、ということに立ち返りながら、一つの価値観を押し付けるのではなく、みんなで合意できるものにしました。ここは勉強の場というよりも、人と人がつながることってこんなに楽しいんだな、人間って素晴らしいなと感じてもらえればうれしい。本当に、ウトロはそういうところなのです。

藪本 日本人で館長になるということのプレッシャーはなかったのですか。

田川 ありましたよ。でも、在日の人たちが抱える問題というの

は、彼女、彼らの側に問題があつて生じているわけではない。在日問題ではなく、在日日本社会問題なんです。この私たちの社会の仕組みが、どこかいびつで不公平だから生じる問題だと、私は思っている。例えば、彼らは十分な年金がもらえるところで働いたことがないので、高齢になれば生活保護を受けます。これは、社会のセーフティーネットですから、堂々と利用すればいいわけですよ。それを「生活保護受けてるくせに」とか「在日のくせに」とか言われるのは、違うのです。彼女、彼らが怠け者だったわけではなく、この社会の問題なのです。

※関連記事は11頁を参照



同館の1階は、人々が集うスペースになっている

●ウトロ平和祈念館

<https://www.utoro.jp/>



* 3) 京都ウトロ地区放火事件：京都府宇治市のウトロ地区において、2021（令和3）年8月に発生した放火事件。ウトロ平和祈念館に展示予定であった資料約40点も焼失した。同地区で生活する在日韓国・朝鮮の人々に対する犯人の差別的な動機によるものであり、裁判で懲役4年の実刑判決が言い渡された。しかし、現状、差別に基づく犯罪を規定する法律がないため、ヘイトクライムと認定はされなかった。

※後記 苦難の歴史があるウトロなのに、生きているって素晴らしいなあと、とても心が温かくなりました。百聞は一見にしかず。ぜひ、ウトロで出会ってみてください。



祈念館の敷地内に移築された飯場。田川さん曰く「飯場は、もっとボロボロだった。きれいに再現しすぎ（笑）」
右下：ウトロを訪れた人を温かく迎え入れた金君子さんの部屋を再現した館内展示



ウトロ地区の住民は、戦後、差別と貧困にさらされ、劣悪な生活環境に置き去りにされた



ウトロ地区内の倉庫の外壁には韓国・セウオル号沈没事故の生存学生によるイラストが描かれている



ウトロ地区 放火事件の現場

祈念館のそばには、生々しい焼け跡が現在も残っている
焼け跡の一角には、ウトロのおばちゃんが植えたトウガラシやエゴマの畑が



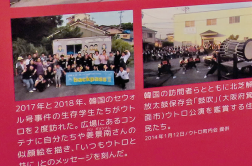
朝鮮人学校・久世初等学院記念写真
(1946年)

アンタらもな、もう落ち込まん顔上げて前
向いて歩きや。生きとったらなんとなかなるけ
ん。ウチらずーっとそうしてきたんや。
これからやで、そうちゃうか？

ウトロの交流の輪は、国内外に広がり続けている

4-2-1 さらに広がる交流の輪 더욱 확대되는 교류의 끈

2015年8月、韓国の人権番組「無期拷問」が撮影に就いた。9月に放映されると韓国でウトロが特集ワード1位になるなど、大きな反響を呼んだ。その後多くの韓国市民がウトロを訪れることになった。



4-2-2 市民や青少年の学びと 交流の場 시민과 청소년들의 배움과 교류의 마당

近隣の福岡県東郷町の児童が交流する。2014年2月。



ウトロ平和祈念館

京都府宇治市伊勢田町ウトロ 51-43

<https://www.utoro.jp>

※ 関連記事は1頁（インタビュー）を参照